文の要素“主語”“目的語”“補語”の認知と識別について

——Jespersen と Fries との比較から——

西　田　稔*

On the Recognition and Discrimination of Elements of the Sentence: "Subject" "Object" "Complement"

— A Comparative Study of Jespersen and Fries —

Minoru NISHIDA

序

いま，この小論の表題にあげたテーマについて，Jespersen の主張・方法と Fries のそれとを比較考察の上，その点についての両者の特質を明らかにし，加えて若干の批判を述べようとすれば，どこから手をつけてよいかが実は先ず相当に困難な問題となる．何故ならば“主語”“目的語”“補語”等の認知及び識別は，何れの体系的文法においても，実に文 (sentence) の認知から始まり，語類（品詞）の識別と分類という“文法”の手がかりの設定手続きから，それらの語類の連語上の機能または“文”全体の構造分析にまでその方法論において密接不可分に関連しているからである．即ち，それらの諸手続き・諸前提の上に，始めてそれぞれの体系の中での“主語”“目的語”“補語”の意味が明らかにされ，また一方それぞれの文の分析 (analysis of the sentence) が成立するのである．従って，当面の主題を取り扱うについて，丁度 Jespersen が彼の *The Philosophy of Grammar*[1] の Preface において各項目の配列に困惑し，“the subjects they (i. e. the chapters) deal with interlock and overlap in the most bewildering way” (p. 8) と述べているのと同様の事情が生じるのであるが，しかしここでは，なるべく重点的直接的に小論の表題のテーマ中心に扱い，その面から逆に各有機的体系の特質を少しでも俯瞰し得ればと思う．

1. Jespersen における“主語”“目的語”“補語”

The Philosophy of Grammar（以下 *PG* と略す）において Jespersen は，主語と述語 (subject and predicate) の関係を，彼の nexus 論に関連づけて

> The discussion of the two members of a nexus has already to some extent anticipated the question of the relation of subject and predicate, for in those nexuses which constitute complete sentences, the "primary" has been shown to be identical with the subject, and the adnex (secondary member) identical with the predicate; (*PG*

* 英語英文学研究室（昭和57年9月30日受領）

p. 145)

と述べている.

またJespersenは，上の引用した文に続けて，それまでの通俗的，またはschool grammar的ないくつかの"主語"の定義を批判している．たとえば，"The subject is sometimes said to be the relatively familiar element, to which the predicate is added as something new." については，"Who said that?" という問いに対する答え "Peter said it." において，Peter は新たな要素でありながら明らかに"主語"であるとして，上の定義の不完全さを指摘している．またもう一つの定義 "The subject is what you talk about, and the predicate is what is said about the subject." についても "John promised Mary a good ring." において，「それについて何事かがいわれているもの」は四つある：(1) John, (2) a promise, (3) Mary, (4) a ring がそれであるとして，"主語"がこのように'題材'，すなわち'話題'と一致させられているような定義の無意味さを例証する，等々の批判を行なっている（この後者の定義の批判は Fries が *The Structure of English* (p. 173)[2] で行なっているのと同じである)．そのあと subject という語のもつ曖昧性が「心理的及び論理的主語」に関しての多くの論議において混乱を引き起していることを述べ，Jespersen は"主語""述語"という術語を文法的な意味に限って使用することを提唱し，論理的とか心理的とかの考察に迷い込むことを拒否する．

しかし，その「文法的主語」とは何か，ということになると，再び彼は彼の 'three ranks' の方を振り返って次のように繰り返す：

> Clearly to understand what the word subject means in its grammatical application, it will be well to recur to what was said in the chapter on the three ranks. In every sentence there are some elements (secondary words) which are comparatively fluid or liquid, and others (primary words) that are more firmly fixed and resemble rocks rising out of the sea. The subject is always a primary, though not necessarily the only primary in the sentence; (*PG* p. 150)

従って，ここでわれわれは，彼の'文法的'主語の意味を見極めるために，彼の 'three ranks' とそれらの適用される 'junction', 'nexus' のそれぞれの意味と性質を検討しなければならない．

PG 第7章において Jespersen は，語の結合を考える時，実詞は常に実詞であり，形容詞は常に形容詞であるという各品詞の語類所属は変らないが，連語的関係において，語が品詞に分類されるのとは別に或る従属関係があることを指摘し，次のように述べる：

> In any composite denomination of a thing or person..., we always find that there is one word of supreme importance to which the others are joined as subordinates. This chief word is defined (qualified, modified) by another word, which in its turn many be defined (qualified, modified) by a third word, etc. We are thus let to establish different "ranks" of words according to their mutual relations as defined or defining. In the combination *extremely hot weather* the last word *weather*, which is evidently the chief idea, may be called primary; *hot*, which defines *weather*, secondary, and *extremely*, which defines *hot*, tertiary. (*PG* p. 96)

これは従来，形容詞的に用いられた名詞とか，名詞的に用いられた形容詞とか（一般的に equivalent という概念で整理される）説明されたところの現実の連語上の語の機能を，より明確に客観的に処理し得る方法というべきであろうが，ここで当面重要なのは，実際の

連語の中にあらわれた語についてこのような syntactical な level からのその語の機能の考察において，現実に各語の ‘rank’ を決定する基準は何かということである．Jespersen によれば，define（規定）またはqualify（制限），modify（修飾）という言葉が使われ，define するものと define されるものという意味での相互関係であり，ある語によって規定は受けるが自らは他の語を規定する関係になく自立している語を一次語と呼び，一次語を規定する語を二次語，二次語を規定する語を三次語と呼ぶ．ここで基準になっているのは規定関係であり，修飾・被修飾ということである．しかし，この規定関係を見定める外形上の特徴としては，語形態上の対応関係もなく，明確な位置関係の説明も与えられていない．またもちろん品詞分類とは別の level のことであるから，従って語の従属関係を知るには，あらかじめ語の辞書的意味が分っていなければならないことになる．つまり意味中心の考察に頼らなければならぬわけである．もっとも，ここには暗黙のうちに既知の事実として語の位置関係が相当程度まで認められているとも言えよう．でなければ語相互の有意味的な連結ということが成り立たない．これはまた形容詞について，従来の school grammar における「名詞，代名詞を修飾する語，すなわち名詞，代名詞によって示されるものを叙述または指摘する語」という機能による定義を下す場合，やはり語の文中の位置関係（構造言語学でいう ‘distribution’）というものを暗黙の前提としているのとも関連している．実際 Jespersen が各種 ‘junction’ を分類して取り扱う手続きは，Fries が *The Structure of English* の中の Structural Meanings: “Modifiers” の章で，語の位置関係と機能語を考察の基準にして各種修飾語を取り扱っているのと一脈相通じる面をもっている．しかし，Jespersen では，こうした語と語の位置関係は全く表面には取り上げられていないのであり，それ故それは考察の基準としての明確さも一貫性も当然有していない．

しかし，この ‘junction’ における連語的関係の語の ‘ranks’ の考察は “*stone* wall” “a *queen* bee” “You had better bow to the *impossible*.” 等の語や，また進んで各種の句や節の記述上の取り扱いに種々の level の基準の混入を避け，すべてを連語・文中の語句相互間の規定関係という機能において説明し，それらを無色な primary, secondary, tertiary という術語を用いて ‘ranks’（順位）において見る点に，従来の equivalents の考えよりはるかに一貫性のあるすっきりしたものがある．ところが，Jespersen は更に進んでこの ‘ranks’ の考え方を，ふつうの意味で一層主部と述部の関係をもつような種類の連結及び完全な ‘sentence’ といわれるものにも拡げ適用する．“a furiously barking dog (=a dog barking furiously)” と “the dog barks furiously” とを比べて，前者の結合関係と後者の結合関係に同じ語（句）間の従属関係を認めるのである．そして，またこの両者の間には或る根本的相違があるとして，前者の結合を ‘junction’ と呼ぶのに対して後者の結合を ‘nexus’ と名づける．たしかに “a furiously barking dog” において “a furiously barking” の部分は ‘dog’ を規定しそれについて叙述していると言えるだろう，そして “the dog barks furiously” において，それと同じ関係を見て ‘the dog’ は ‘barks furiously’ の部分によって規定し叙述されているとはいえる．Jespersen は ‘junction’ と ‘nexus’ の間のこのような類縁関係について，次のような諸家の説を引用して両者間の橋渡しを説明しようとする：

> Paul thinks that an adjunct is a weakened predicate ..., and in the same way Sheffield says that an adjunct “involves a latent copula”....
>
> While Paul thinks that junction (attributivverhältnis) has developed from a predicate relation, and therefore ultimately from a sentence, Sweet ... says that “assump-

tion" (his name for what is here called junction) is implied or latent predication, and on the other hand, that predication is a kind of strengthened or developed assumption .... (*PG* pp. 114–115)

しかし，それにもまして，いまわれわれの当面の問題となるのは，Jespersen が

The relation between *the dog barks* and *a barking dog* is evidently the same as that between *the rose is red* and *a red rose*. In *the dog barks* and *the rose is red* we have complete meanings, complete sentences, in which it is usual to speak of *the dog* and *the rose* as the subject, and of *barks* and *is red* as the predicate, which the combination is spoken of as predication. (*PG* p. 114)

と述べていることである．これは上述の諸家からの引用などとも関連して，肝心の subject と predicate という意味があたかも既知のことのように扱われて "it is usual to speak of *the dog* add *the rose* as the subject ..." などと述べている不明確さはおくとしても，結局「subject とはその sentence 中で中心となる最も重要な語(句)であり，predicate はその subject のあらわすものを規定し叙述するものである」という，Jespersen 自身が，先に見た通り *PG* 第11章の冒頭において批判している定義にもどってしまうものである．実際，彼が第11章での Grammatical Subject の項の最初に 'three ranks' に関する事柄に立ち戻ることを要請した後で述べている "In every sentence there are some elements (secondary words) which are comparatively fluid or liquid, and others (primary words) that are more firmly fixed ...." は，第7章で 'junction' についての "In the combination *extremely hot weather* the last word *weather*, which is evidently the chief idea, may be called primary: *hot*, which defines *weather*, secondary," に一致していて，規定するものとされるもの（修飾・被修飾，もしくは自立的）という関係にあり，しかも先に見た通り 'junction' における語のそのような機能（暗黙の中に認められる位置関係をも含めて）による相互関係は，'nexus' においてはそれらとの意味上の類似の関係に飛躍して，全く新たな機能関係としての明確な説明が与えられていないのであるから，そこにおける subject と predicate は syntactical な level の考察を欠いた全くの意味中心の語の規定関係——修飾（叙述）するものとされるもの——に基準をおくものと言わねばならない．即ち 'junction' が唯一つの概念を提起するのに対し，'nexus' は actor と action という二個の概念が結合する仕方であり，もしくは繋辞 (copula) によって結合された判断（Fries のいう Class 1語が be に代表されるある種の少数の Class 2語の一つのあとにあって「認知」の関係にある場合に当る）またはそれに準じた関係であると言えよう．ここに二次語として定動詞が入っていれば完全な文 (complete sentence) を形成する種の 'nexus' となるのである．この従来から用いられている定動詞 (finite verb) というのは Fries のいう「Class 1語と形式上の或る対応によって結ばれている Class 2語」のことであるといえるだろう．Jespersen はその品詞論の動詞の項で

If now we compare the two combinations *the dog barks* and *the barking dog*, we see that though *barks* and *barking* are evidently closely related and may be called different forms of the same word, it is only the former combination which is rounded off as a complete piece of communication, while *the brking dog* lacks that peculiar finish and makes us ask: What about that dog? The sentence-building power is founded in all those forms which are often called "finite" verb forms .... (*PG* p. 87)

と述べ，また ‘junction’ と ‘nexus’ の区別に関連しても

> One (i. e. junction) is unfinished and makes one expect a continuation (*a red rose, — well, what about that rose?*) and the other is rounded off so as to form a connected whole (*the rose is red*) .... This is generally ascribed to the presence of a finite verb (*PG* p. 115)

と同様のことを繰り返している．従ってこの定動詞 (finite verb) という考えは，Jespersen にあって（またそれまでの school grammar にあっても）その疑問文などにおける位置関係を含めて，‘junction’ にけおる ‘ranks’ の ‘nexus’ への導入に意味中心の説明の混入や従って種々の不明確さをもちつつも，Fries のいう Class 1 語と Class 2 語との形式上の或る対応関係にある結合によって文が成立すること，と同じことを指向しているのである．

以上の Jespersen における subject と predicate の根本的意味を要約すれば，連語的関係において主要な概念 (chief idea) である一次語を subject とし，その subject を規定し修飾し叙述する部分を predicate としたのであり，その意味の一次語を含む連語中に定動詞があれば完全文の形として認め，この時の一次語を“主語”とするのであり，意味中心の傾向の強いものであるといえる．しかしなお文中の“主語”“補語”を be 動詞が連結する時の“主語”“補語”の識別，及び文中に二個以上の自立的一次語がある場合の“主語”“自的語”“目的格補語”の認知と識別において，一層意味中心となっている．

即ち，“主語”と“補語”が be 動詞によって結ばれる場合の識別について，語順（“主語”を始めに置く）ということは，非常に多くの場合識別の基準となるが，決定的なものではないとして “A scoundrel is Tom.” とか “Great was his astonishment when he saw the result.” という例をあげている (Fries においては，同じ「認知」の関係にある文でも“述語主格”(Class 1 語）と，それと同じ場所にあらわれる形容詞 (Class 3 語）との共通な取り扱いをする“補語”という文法範疇については説明が与えられていない)．このような場合，要するに predicative は subject にいて何かを説明するのであるから，predicative の方が subject よりもより一層広い外延 (extension) をもつということに着目して識別するというのが Jespersen の主張である．その時彼が *PG* 第 5 章で扱った実詞と形容詞とのもつ語の意味の内包 (connotation)・外延 (extension) の相違（形容詞は実詞ほど特殊的でなく，また同じ実詞でも普通名詞は固有名詞より特殊的でない）と共に，不定冠詞・定冠詞や this, that 等 (Fries のいわゆる ‘determiners’) の観察が重要になる．従って “A scoundrel is Tom.” は ‘Tom’ が主語であり，“A lieutenant is an officer.” は ‘lieutenant’ の方がより特殊であり“主語”である．形容詞は（語順に関係なく）一般に補語となるのも一貫性をもって説明される．この方法は各語の辞書的意味を知っていなければならず，意味を基準としたものではあるが，Fries の分析法では決定しにくいところの “Coward are thieves.”（この場合「すべての泥棒は臆病者——すなわち臆病者の中に含まれる者——である．」となって ‘thieves’ が主語とされる）などの例にも適用できる長所をもつといえる．

“目的語”と“主語”の区別については，Jespersen は全く意味中心で語順のことに言及せず，What is an Object? という項目名のもとに次のように述べる：

> In sentences containing a verb it is nearly always easy to find the subject, for it is that primary that has the most immediate relation to the verb in the form in which the latter actually occurs in the sentence: (*PG* p. 157)

このようにして識別した“主語”でない一つまたは二つの一次語が“目的語”であるとい

うのである．この説明は "John beats Paul." の 'John' を "主語" として 'Paul' を "目的語" とする根拠を与えているようには思えない（ここでも暗黙の中に語順が認められているのかも知れないが）．

"目的語" 自体の定義については，Jespersen は "The object denotes the person or thing on which the action of the verb is performed." という従来最も普通に行なわれて来た定義を批判して，"He fears the man." という文においては上の定義の関係は逆で，文法上の主格が影響をこうむる対象であるという Sweet[3] の言を引いている．しかし，ここでは Jespersen は Grammatical Object といった項目を立ててもいないし，彼自身の "目的語" の定義を与えてもいない．従って彼にあっては，"目的語" は語順（位置）・形態・意味の何れの面からもほとんど明確にされないまま，種々の実際例の特殊な意味に従って分類されているだけである．文に"主語"以外の二つの一次語がある場合，一つが「間接目的語」で他が「直接目的語」である二つの目的語をもつのか，又はその中に 'nexus' 関係を含む一つの目的語であるかであるとしている．いわゆる「目的格補語」の位置の一次語（それに同位置の二次語がある場合も同様）は，"目的語" と結び 'nexus' を形成して一個の 'nexus-object' とされる（従ってその「目的格補語」の位置の実詞は一次語でなく二次語とされる）ところに一貫性があるのだが，先に見た通り 'nexus' の基準が意味にあるのだから，この場合も辞書的意味を知った上で何れの場合であるのか識別されるのである（なお Fries においても，この構造上の意味の相違はそれぞれの Class 1 語，が 1^a1^c か 1^b1^b かというように同じものを指すか異なるものであるかを知らなければ識別できない．これもまた辞書的意味を知らなければ不可能な操作であろう）．

Jespersen の "主語" "目的語" "補語" について以上概観したところ，彼のそれらの認知と識別の仕方は，ある程度の文中の語の位置関係を暗黙の中に考慮に入れているにしても意味中心であり，加えて時には論理学的な内包・外延などという基準により，時には語と語との規定・修飾関係という機能に関連し，時には純然たる辞書的意味に頼るという綜合的折衷的方法である．これは一方において非常にキメの細かい考察を可能とするが，同時に非常に客観的な明確さを欠き論理的一貫性も弱いもので，従って科学的体系としての文法組織上多くの点で不満足な面をもつといわなければならないだろう．

2. Fries における "主語" "目的語" の意味

Fries は *The Structure of English*（以下 *SE* と略す）において，できる限り意味を基準にしないで，また言語を常に有機的な全体構造の中で捉え，従ってそれを構成している各要素も個別的な要素としての面を見るのでなく，全体構造の中で果す役割（機能）の面から見てゆこうとしている．彼が意味を排するのは，語の辞書的意味の利用は主観によりいろいろに解されるということと，また語（句）の意味による定義や機能による定義が実際には '抽象名詞' と '形容詞' が同じく「ものの性質を表わす語」であったり，同じ語（句）が文中で種々の機能を果したりするので，何れも実際の言語構造を説明記述する基準とするには全く不完全で曖昧なものとなるからである．

定義に関しては Jespersen が従来の school grammar 的な定義をすべて批判し，できる限り定義なしで彼の '文法理論' を組み立てようとした態度を Fries は一層厳格に一貫した主張としたもので，辞書的意味を可能な限り背後に押しやったのは，科学としての言語学における客観性を高めようとしたものである．即ち，語や連語の testable な形式，位置等の形態や機能のみを最大限に駆使して，しかも方法的に一貫性があり簡潔な '文法' の

組織を目差したものである．従って，語の形態 (form) の面からの考察はすべて補助的なものとして，品詞の決定から，（聞き手の反応を目安として分類された）文の種類を生じるそれぞれの文の型の説明や，最後に文の構成要素の分析（ＩＣ分析）[4] に至るまで，文中の語（句）の機能面から考察するに際し，その客観的な基準としては主として語句相互間の位置関係に重点を置き，これに15の groups に分類された ‘function words’ や，Class 1語と Class 2語との形式上の対応関係などを利用して，英語における言語構造の最も客観的な最も方法的に一貫せる記述を行なおうとするのである．

このように実際の連語（文）構造の中で語が，その連語構造において，ある機能をもつ定まった「位置」にあらわれるという分布 (distribution) の概念を基準として語類の分類を行なった Fries においては，Jespersen のように連語的関係の中で語が実際に果している機能にもとづいて，語類とは別に ‘ranks’ を立てて語の相互関係の説明を改めて行なう必要はないといえる．（Fries は逆に，語の形態的特徴を補助として用いることによって，“their *childhood* days” の *childhood* を Class 3語としないで Class 1語としている．）また文の分析においても，Class 1語と Class 2語の形式上の或る対応関係からいわゆる ‘完全文’ を見定め，両者の相互位置から文の種類を知り，他の個々の構成要素（単語）をもそれぞれ品詞別・各グループの機能語の別に認知し，必要があれば音調をも考慮に入れて，あとは第1段階として文頭文末に sentence modifier としての語句や包入文 (“included” sentence) や継続記号のようなものがあればこれらを ‘主文’ と切り離し，次に文の基礎的構造たる形式上の対応関係をもった Class 1語と Class 2語をそれぞれの修飾語をともなったまま切り離し，その次にそれぞれの部分の中における主要語とその修飾語に分けるという直接構成要素の階層的な分析（ＩＣ分析）が Fries の文の解剖の方法である．上の操作はすべて語の所属種類の認知と位置関係にもとづいてなされる．従って，いわゆる“主語”“述語動詞（定動詞）”“目的語”“補語”等，従来 SVOC であらわされたような構成要素の機能の直接表示は，全体的構造の階層分析の型によって認知されるので不必要となる．そこで Fries が *SE* 第9章において行なっているのは，従来のいわゆる “subject” “object” の構造的意味を示そうとしているのである．

しかし，ここで Fries の IC 分析を少し詳細に検討すると，文の分析の最初の段階で，その文の中核構造をなす Class 1語と Class 2語をその両者の間で切り離して，それぞれの修飾語（いわゆる ‘目的語’ もこの意味では文を形成する Class 2語に従属する）をもった二つの部分に分ける時，Class 1語を含む方は従来の ‘主部’ に当り，Class 2語を含む他方は従来の ‘述部’ に当る．そのあとの両部においてそれぞれ主要語とその修飾語(句)に分ける時は，“目的語” が ‘定動詞’ に従属するとする関係を除けば，従来の ‘形容詞’ ‘副詞’ 及びその equivalents による語と語の規定・修飾（従属）関係に平行することになるだろう．このような階層による分析は丁度 Jespersen の ‘nexus’ と ‘junction’ の応用に類似した結果となるであろう．しかし，Jespersen にあっては先に見た如く ‘junction’ と ‘nexus’ にあって規準に飛躍があり，また特に“主語”と“目的語”の認知・識別において意味関係による ‘定動詞’ との親疎という曖昧な規準を立てていることなど，意味の導入及び幾つかの規準の混用という点，Fries の一貫した明晰な文法組織とは方法論において根本的な差異があるといわねばならない．しかし，このことは一概に全ての点においてどちらかが絶対的に優れているということではないと思われる．Fries は“主語”“目的語”“述語主格 (predicate nominative)”“同格語”“名詞的附加語 (noun adjunct)” の構造上の意味のまとめにおいて，これらの語の文中における主として語順による型を10個の公

式 (formula) によって例示したあとで次のように言う：

> In order to identify and to distinguish these particular structures one does not need to know the lexical meaning of the words, nor even what the sentence is about. He must be able to recognize the Class 1 and the Class 2 words and he must control enough of their meaning to know whether their referents are the "same" or "different," what "substitutegroup" they belong to, and whether a word of that substitute group is structurally substitutible in the utterance. (*SE*, p. 195)

このような意味の支配 (control of meaning) とは，結局各語の辞書的意味を知っての上のことではないとしたら，実際的にどういう手続きによって達せられるのであろうか．

またそのような語の指示するものの異同の識別以外にも，IC 分析において

> Didn't you or he go and see her?
>
> There was a book, not a notebook, on this table yesterday.
>
> A scholar may or may not make money.
>
> Is it all right for me to go there?

などは機械的に階層に分けてゆくことが困難であろう．

なおその他の事項で，例えば Class 2 ↔Class 1 の配列でしかも質問でない文の場合を5種に分けて説明して，(1)ある数少ない Class 4 語が文頭にあらわれる場合 (cf. Seldom is she ready on time.)，(2)機能語 'there' が文頭に来る場合 (cf. There is a guard there.) 等々としているが，これらは従来の項目別な考察と余り異なるところはないように思われる．

このように Fries の文法の客観性・一貫性にも種々の困難や矛盾とみられるようなところが発見されるが，そうした欠点らしいものをもちながらも，それは生きた言語としての英語を構造的型によって捉え，英語における文の構造的意味の特質をその大筋において明確化したものといえよう．元来複雑で，意味と外形式の両面をもち，常にその内部に矛盾を含むともいえる生きた言語の考察には種々の方法があり得るし，またあらねばならない．Jespersen は主として意味関係から，従来の定義にとらわれず英語の実際面を考究し，Fries は大体同じことを，語の屈折変化の大部を失った現在，主として語の文中での有機的位置関係によって，辞書的意味とは別の level の構造的意味（文法的意味）を表わすことについて一貫して述べているところに，それぞれの意義があるともいえよう．

注

1. Otto Jespersen, *The Philosophy of Grammar* (London: George Allen & Unwin, 1958. 初版は1924)，以下 *PG* と略し，引用のページは本文中に示す．
2. Charls Carpenter Fries, *The Structure of English* (London: Longmans, c. 1952)，本文第2章では *ST* と略し，引用のページは本文中に示す．
3. Henry Sweet (1845–1912) イギリスの音声学者・英語学者．
4. Immediat constituent analysis「直接構成要素への分析」．略して，ＩＣ分析と記す．

Summary

In this paper I study Jespersen's and Fries' grammartical ways of recognizing and discriminating the elements of English sentence. Both Jespersen and Fries, in each way, aim to treat this problem scientifically, rejecting old traditional school grammar which has no accurate analysis of the structure of English.

Jespersen analyzes English sentences in rather various ways, using, for exsample, the terms of logic, "connotation" and "extension", too.

Fries uses rather purer method to analyze the structure of English.

Comparing the two cases, Jespersen's and Fries', I try to find out the characterstics of these two ways.